

氏名： 大室和也

実施国：インド

協力活動

活動名称 南インドの地域在住障害児における理学療法の支援

実施期間 2012 年 8 月 21 日から 2012 年 11 月 18 日

(1) 申請した動機

私は、2010 年から 2012 年までウズベキスタンのリハビリテーションセンターで活動した。そこでは、リハビリテーションセンター内の活動にとどまっており、地方地域の自宅を拠点とする患者の生活とリハセンターでの訓練の関連付けを行いにくい状況であった。そうした中でも、生活に適合させた工夫した道具を使用することで、自立した生活を実現している患者の様子を見ることができた。リハセンターのような施設で実施する理学療法を支援する時には、地域生活がどのように営まれているかを、その国の諸条件を含め把握する必要があると改めて痛感した。

今回の活動は、物的要求を満たすことの少ない開発途上国の地方地域において、施設に通う障害児を対象に、包括的な生活支援を実施することができるため、応募した。そこでは、地域と施設の連携システムを知り、地域の拠点となるような施設での支援方法を学ぶことができると考えた。さらに、このような地方地域で得られた知識や技術は、今後、他の開発途上地域で支援を行う際に、適用・応用できる可能性が高いものと考えた。

(2) 活動内容概要

私は、二カ所で活動を行った。

一つ目の「Shine Education Trust」では、8 月 21 日から 10 月 3 日まで活動した。そこでは、通園してくる子どもたちに対し理学療法を実施すること、理学療法等に関して所属スタッフと議論することが主な活動であった。ボランティアが介入することにより、普段手がかけられていなかった子どもに対して理学療法を行うことができた。

二つ目の「Amar Seva Sangam」では、10 月 4 日から 11 月 16 日まで活動した。そこでは、主に CBR（地域に根ざしたリハビリテーション）を担当している理学療法士やソーシャルワーカーと共に、施設外の村々へ巡回し、その状況に応じて出来ることを手伝った。理学療法士とともに巡回するときは、対象者に対する自宅での理学療法について議論しながら、対象者やその家族に実施、指導した。施設のスタッフはそれぞれ、非常に多くの対象者を抱えていたため、十分な指導の時間が取れておらず、また理学療法の知識も不十分であった。そこで、自宅で作れる簡単な訓練方法と、障害をもつ子どもの姿勢の留意点等の資料を作成し、提供した。また施設内では、脊髄損傷者、脳性麻痺児に対する理学療法を担当した。



地域の知的に障害を持つ児を預かる施設での理学療法



各地域のリーダー・ワーカーの会議

(3) 活動の成果・苦勞した点・反省点等

活動先での子どもたちへの厳しい躰について、現代日本との違いを強く感じた。担当する先生や理学療法士は、親の目の前でも大声を上げ、知的障害を持つ子を叩くことがあった。私は、それがその施設、延いてはインドのやり方であると理解しようと心がけたが、ほとんど目を背けることしか出来なかった。例えば自閉症の子どもに対し環境を設定したりするなど、子どもとの関わり方を工夫するよう働きかけることが出来たのではないかと反省している。

Sangam では、施設内に普通学級と特殊学級が混在しており、普通学級の子どもたちが車いすの生徒や先生を押しながら登校していた。一緒に勉強したり遊んだりすることで、人の「違い」を自然に吸収している様な雰囲気に変化を感じた。また、障害当事者が住みやすい社会を目指す上での理学療法の役割として、施設で出来ること、地域で出来ることの線引きを明確にすることができた。これにより、今後理学療法士がどのような働きをしなければならないのかをはっきりとさせることができた。

(4) 今後のプラン

今後は、障害当事者を含めた誰もが住みやすい社会を目指すために活動していきたいと考えている。障害当事者のニーズを汲み取れるという理学療法士の強みを生かしつつ、途上国での社会政策や地域づくりの現場に携わりたい。

現在、2013年1月から英国での語学留学が決定している。その後は、同大学の大学院にて障害学を学び、社会政策の現場へすすんでいきたい（未決定）。